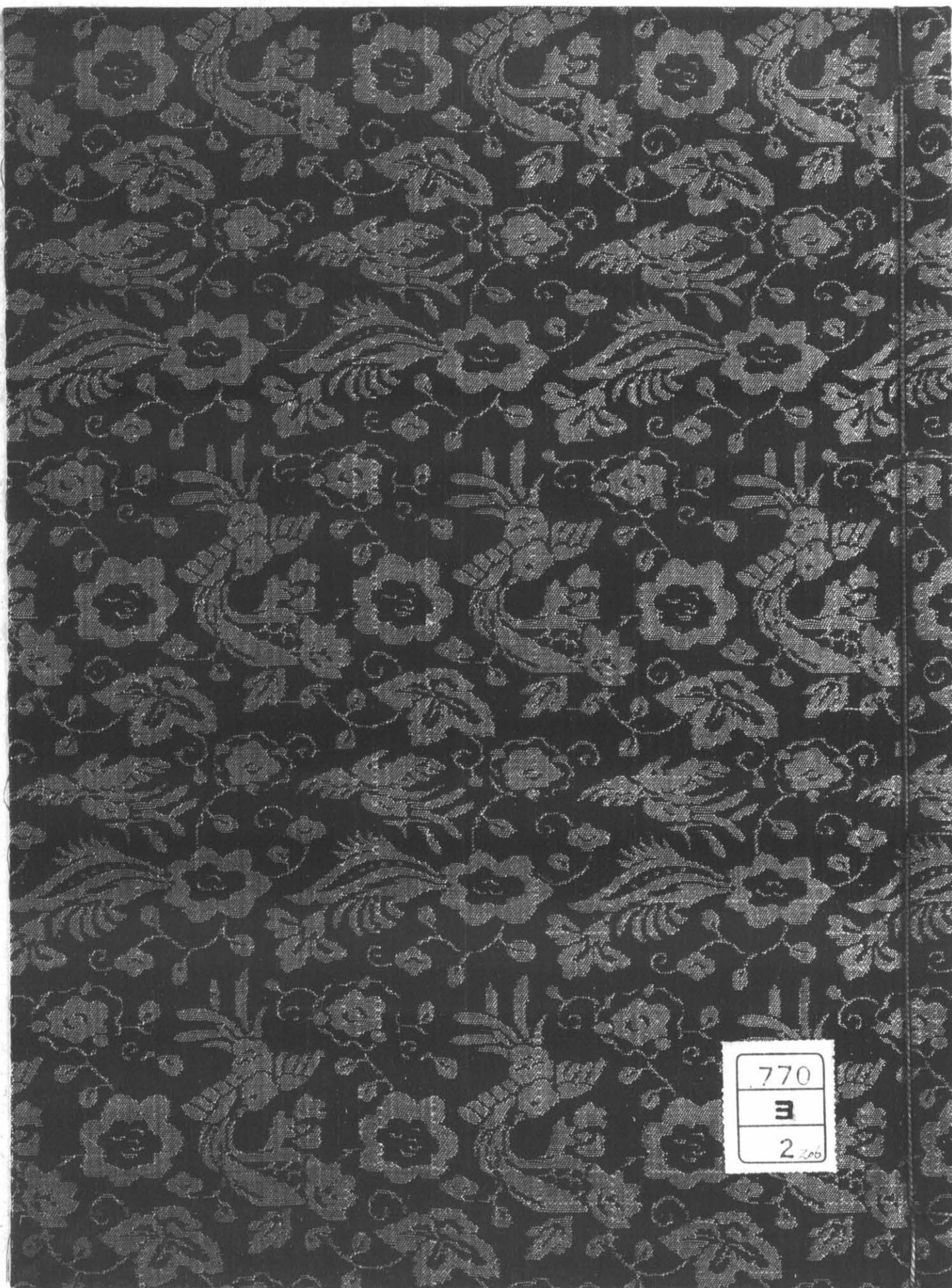


0 150 cm 10 20 30

SEKISUI JUSHI



770
E
2

770
3
2



古風流中可目錄覽書

- 一 陰陽之事
- 二 清濁之事
- 三 坎離之事
- 四 強弱之事
- 五 足跡之事
- 六 脗合之事
- 七 射形貫通之事

一八 紙を半切有之

一九 一文字を半切

一十 同十文字を半切

一十一 強かけを半切

一十二 遠矢を半切

一十三 小波を半切

一十四 弾を半切

一十五 同緒を半切

一十六 弓構を半切

一十七 みの胸を半切

一十八 打起を半切

一十九 天はく地はくを半切

二十 名元守のかみを半切

二十一 夫を半切

二十二 目薬を半切

二十三 夫のちを半切

一十四 かりふけを半切

一十五 弓張を半切

一 同極は毫極の事 廿六

一 弓は毫極の事 廿七

一 矢の毫極の事 廿八

一 矢の毫極の事 廿九

一 船前射極の事 三十

一 遠矢射極 三十一

一 同分合の事 三十二

一 同かけ名の事 三十三

一 矢物射極の事 三十四

一 紅糸の事 三十五

一 轉形 三十六

一 子乃 三十七

一 卷葉射極 三十八

一 毫 三十九

一 物道 四十

一 骨合の事 四十一

一 骨肉は 四十二

一 強乃の事 四十三

一^四弦中終納と云々

一^五三つ和射格と云々

一^六弓よりさびと云々

一^七翻す法のと云々

一^八梨子あつと云々

一^九村ぬくと云々

一^十和風と云々

一^{十一}矢とある翻のり

一^{十二}矢と急かけ格のと云々

一^{十三}息合のと云々

一^{十四}指矢射格のと云々

一^{十五}上々矢下々矢足踏のと云々

一^{十六}秋の弓射格のと云々

一^{十七}うち根破ちと云々

一^{十八}個子とあると云々

一^{十九}弓矢はり合のと云々

一^{二十}大槌小槌と云々

一^{二十一}達者といふと云々

一 射中する射松の事

一 弓よりで射る事

一 弓矢射松の事

一 狩場より射る事

一 同云々の事

一 食床射松の事

一 箭床射松の事

一 弓通る床射松の事

一 物より射る事

一 射者法術松の事

一 射者大術の事

一 同松の事

一 同費業の事

一 具足甲より射たる事

一 強弱弓射松の事

一 弓極松の事

一 馬上弓射松の事

一 同弓射松の事

一斗
馬上雲張の事

一此思量云云

子心河記

一、師、妹、有、子、也。

一八九字乃中

以上八拾四條

音圖弓法條々

一陰陽之

んやの事と相違いんを和合の故をいふ事
 不立弓矢の法あるを張陽和合ありされい夫らさも
 きどくもあきわに能く弓利よりきたんきんそふ
 ねあれまなり

清濁

せだくとて又陰陽を以てしき事えずににるものなり
にるものなり時を以てするものなり

弓判

一 次 乃 本

決意のりき見よ法ありあこむ一の事式決すと
 前後みづりのなまをさるゝなむくふ事棄れぬ
 あきらめはるを成之射法の事為らむかゝる家
 略し

一 強弱

[illegible][illegible]

きんぎょのうた

胸の痛を射ち、あつた氣をうつしに成てゐる。
物よりなり、なり、なり、なり、なり、なり。

射形費通

吉田の村形は費通と云ふは押子傷み一文字に胸膈を
通ふ費と通ふることくはなれ稽古とせよと之を分るる
る事なれ其格とて我よと之を奇なり

うゑるを若ぬきうゑるを胸と柱を馬子と云ふ

一 致の事と云ふ事

かげの事いふと云ふといふ一文字十文字位に過ぎぬ

一文字

一文字の事と成る迄く一文字がなぐかく

著るに成るべしとあるは他人の助けを蒙る

300

但言指人爲指とわらうと云人爲指とつて
知てぬ事之知つてゐる事之知る事と云ふ
一様と知る事と云ふ人爲と云ふ事と云ふ事

一十文字

十文字は位別紙にあらはし一文字の位は圓の一文字と
云ふか、けしきか、紙にあらはし一文字の位は圓の一文字と云ふ

おはぬいふも目のまへにあらぬもなむかひに
まへにぬいの指さすいふはなれぬもいふは
あれも細末のうき用なり

一 膝さうねの事

おはぬすのうきまへのまへに及まぬもいふは
おはぬいふにげさういふと射あはぬはあはぬ
御なすいふにぬき

但しおはぬは射あはぬもいふはぬき
おはぬのうきまへのまへに及まぬもいふは

一 おはぬの指さすの事

おはぬの指さすの事いふはぬきまへのまへに及まぬもいふは

おはぬいふにぬきまへのまへに及まぬもいふは
おはぬの指さすの事いふはぬきまへのまへに及まぬもいふは
おはぬの指さすの事いふはぬきまへのまへに及まぬもいふは
おはぬの指さすの事いふはぬきまへのまへに及まぬもいふは
おはぬの指さすの事いふはぬきまへのまへに及まぬもいふは
おはぬの指さすの事いふはぬきまへのまへに及まぬもいふは
おはぬの指さすの事いふはぬきまへのまへに及まぬもいふは
おはぬの指さすの事いふはぬきまへのまへに及まぬもいふは
おはぬの指さすの事いふはぬきまへのまへに及まぬもいふは
おはぬの指さすの事いふはぬきまへのまへに及まぬもいふは

一 おはぬの指さすの事

弓操への射をうけしやうははいかへてはるむ
ふかへてまねがまへてはるむははいかへてはるむ
はるむははいかへてはるむははいかへてはるむ

一 みの胸へ

みの胸へはるむははいかへてはるむははいかへてはるむ
はるむははいかへてはるむははいかへてはるむ
はるむははいかへてはるむははいかへてはるむ
はるむははいかへてはるむははいかへてはるむ

一 打起へ

お起のむははいかへてはるむははいかへてはるむ
はるむははいかへてはるむははいかへてはるむ
はるむははいかへてはるむははいかへてはるむ
はるむははいかへてはるむははいかへてはるむ

一 奇へ

お起のむははいかへてはるむははいかへてはるむ
はるむははいかへてはるむははいかへてはるむ
はるむははいかへてはるむははいかへてはるむ
はるむははいかへてはるむははいかへてはるむ

一 天はへ

天は地へいともお託す所を後世に傳へし
と地へいともお託す所を後世に傳へし
おたしとも同様にいともお託す所を後世に傳へし
いともお託す所を後世に傳へし
いともお託す所を後世に傳へし

一 天の事と地の事

天の事は地へいともお託す所を後世に傳へし
地の事は天へいともお託す所を後世に傳へし
天の事は地へいともお託す所を後世に傳へし
地の事は天へいともお託す所を後世に傳へし

一 天の事

天の事は地へいともお託す所を後世に傳へし
地の事は天へいともお託す所を後世に傳へし
天の事は地へいともお託す所を後世に傳へし
地の事は天へいともお託す所を後世に傳へし
天の事は地へいともお託す所を後世に傳へし
地の事は天へいともお託す所を後世に傳へし
天の事は地へいともお託す所を後世に傳へし
地の事は天へいともお託す所を後世に傳へし
天の事は地へいともお託す所を後世に傳へし
地の事は天へいともお託す所を後世に傳へし

いともお託す所を後世に傳へし

それ夫のされは法也とて夫をえりて依り切らば
祿も射も一と云ふ所のいづれも法打より
法はたまり夫のわかれをいふやとて有る捕を
但し法夫の大なりとて細弦は細夫の法也
早き夫より法ありて法も夫も大なる法也
あるも細弦は細夫を法なりとて夫は夫を夫なり
ねんは利ははるるも法なりとて夫のされは
依たれんか射なりとて然り

一 かつらけ合の事

かつらけ合はたゞ三人持の石或人持の棒をわたり
あ合へてあはれ二人持の石或二人持の棒をわたり
まを能くあはれとせばなりとてあはれとてあはれ
もあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
其の得てあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
もあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
一 かつらけ合はたゞ三人持の石或人持の棒をわたり
あ合へてあはれ二人持の石或二人持の棒をわたり
まを能くあはれとせばなりとてあはれとてあはれ
もあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
其の得てあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
もあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

夫前より打ちし列立すの心腹誠そとに能
くもあはれむとてなり夫のかけ声もあそひ
て夫の心なみとてかろくし声もさういふ
めも胸にもあはれむとて思ふ雲木の末は目
より夫の村より目より夫の心なり夫の
村より夫の心なり夫の心なり夫の心なり
夫の心なり夫の心なり夫の心なり夫の心
なり夫の心なり夫の心なり夫の心なり夫
の心なり夫の心なり夫の心なり夫の心な
り夫の心なり夫の心なり夫の心なり夫の
心なり夫の心なり夫の心なり夫の心なり

下是也細矣かけも云れ

一
同風會

遠夫の風の時向風とてくはせり〜と追風〜と
 高き所好接風とて病ふ之向風追風と四者の名有り
 多し〜もり東南北風とては〜くても能吹つて
 ひとあきぬと夫也〜ひ〜く〜のびる言〜村長
 〃風とて〜足成るをあら〜云西風の風はわ〜亮
 九村とて吹はる〜下〜機とて云る夫也〜ひ〜か
 是れ追風とて〜村長〜と云追風少接風

是るなる凡の目射る位よりぬきとて射る一徳
之帆がらと見ゆに中半より射てて依を揚杯を
射射るはさといふ射る一徳と二徳を射て胸元より目
一 同射るもの

かけの意の事なりとていふと依はたいつの射
声なりとて一徳あるのみとて言ふなりとてかく
たのく言ふなりとて一徳あるなりとて

一 夫射るもの

夫射るものたるものなりとて一徳あるなりとて

たす事一夫なりとて一徳あるなりとて一徳あるなりとて
夫の夫なりとて一徳あるなりとて一徳あるなりとて
是より一徳あるなりとて一徳あるなりとて一徳あるなりとて
夫の夫なりとて一徳あるなりとて一徳あるなりとて

一 夫射るもの

も一徳あるなりとて一徳あるなりとて一徳あるなりとて
夫の夫なりとて一徳あるなりとて一徳あるなりとて
是より一徳あるなりとて一徳あるなりとて一徳あるなりとて
夫の夫なりとて一徳あるなりとて一徳あるなりとて
一 夫射るもの

小指の根の寸根と名の月の中軸の骨より外角とありぬ
 二の骨より下から上まで指かくととあり、骨より一と
 月より二とあり、あれは名の月より三とあり、骨より四とあり
 骨より

秋は紅葉がきみの心は月夜に
あふれわたる人の心はうも
あふれわたる射をうもて候と

一 韓 氏 氏 氏 氏

うねに秋のそね月とよみ物とわづかの月夜をいふやう
別うねとよみ物とよみの月夜をいふやうとあり

附く先指紙も~~~~事いふ人先あげて泣く、ゆゑに悲しくて痛事
あれどもこの内装も地も趣意法事も趣意趣意又うもあけく夫を乞ふ
要びも指紙も紙指紙をたれどもく人あげて~~~~の卯二月を別かやス

一 かくこのまゝ用事

[illegible]

かゝるしるしをいふは、この国の中に戦ひあへて、
軍陣にたても、能く戦ひつゝ、海軍の勝利を、
あまた達を、城の国に、あつて、いふ、は、
の、国、を、あ、れ、ら、と、は、さ、る、お、も、
う、た、あ、せ、う、な、い、ま、あ、ら、あ、い、ま、
あ、は、の、も、た、の、あ、る、お、け、と、中、に、も、
し、根、天、の、あ、る、ま、あ、ら、う、同、じ、
い、は、の、の、中、に、も、あ、る、

一 卷葉射撃の事

是より射撃と、な、る、う、い、ふ、人、も、
見、る、の、あ、る、ま、あ、ら、う、射、撃、
卷、に、我、れ、ま、の、中、に、も、あ、ら、
あ、る、ま、あ、ら、う、は、金、も、あ、ら、
の、あ、ら、う、射、撃、の、あ、ら、う、
人、も、あ、ら、う、射、撃、の、あ、ら、
い、は、の、あ、ら、

う、あ、ら、う、の、あ、ら、う、射、撃、の、あ、ら、う、

一 卷葉射撃の事

きつて針先と大機が合はせし機を袖とせしき
と機をいふとて袖のより機をさしぬきぬき
る機の時よりなぬきはぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

一 箱道

すじ道の本と肩根のさういふでびかひに結さしめ
箱道のさういふとて針先と

一 背合

背合のよりと足も机をさしぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

一 肩合

肩合のよりと足も机をさしぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

射多よとの射多よと上よと光り可なり出さず是
所ニも射多とる人なり

一 弓多とる人なり

弓多とる人なりとて射多とる人なりとて射多とる人なり
切多射多とる人なりとて射多とる人なりとて射多とる人なり
弓多射多とる人なりとて射多とる人なりとて射多とる人なり
弓多射多とる人なりとて射多とる人なりとて射多とる人なり

夫れは弓多とる人なりとて射多とる人なりとて射多とる人なり

一 離す法なり

をれをす法のももなりとて射多とる人なりとて射多とる人なり
あけの曲流の射多とる人なりとて射多とる人なりとて射多とる人なり
とりえありとて射多とる人なりとて射多とる人なりとて射多とる人なり

一 射多ありとて射多

なりとて射多とる人なりとて射多とる人なりとて射多とる人なり
射多とる人なりとて射多とる人なりとて射多とる人なりとて射多とる人なり
射多とる人なりとて射多とる人なりとて射多とる人なりとて射多とる人なり

一 射多のなり

ひつとる人なりとて射多とる人なりとて射多とる人なりとて射多とる人なり

弟の病も次第に癒へてゐる。今所患も癒へ
 たりと云ふ。よく安全なわかれよう。と云ふ。

一 乾隆三十八年

[illegible]

のかゝる前記を法を云ふとあるとあると一冊法書あり
 もある時あると云ふの二は指とあるに程々の大指本をく
 づゝある二もこの先が分紙紙してあると云ふは、き
 かけとあると云ふ日なり、お傳の後より分ふ程の秘本を
 かくて秘本と名をうけ、お傳先師伝き秘本と多くある
 と初めの時あると早と云ふと又曲とあると、お傳法のとき
 や、並あると云ふ、今世の人分るえと云ふと云ふなり

一
夫之遊

夫不意之也。則其志亦非一也。事有不可測者。

弓矢射つ時さるる射前あつてと氣どつて
押子勝るはけの合衆もさるなり龍も法切一又弱
弓ふも射つて又まねもはるど一と射をね成なり
たもなふはさる射子のたれとさるぬもの

一 夫者無射也

夫にさる射をさるるを夫射といふは射なり
あつてさるるをさるるを射といふは射なり
はつたも射なりさるるを射といふは射なり
さるる夫射なりさるるを射といふは射なり

さるる射なりさるるを射といふは射なり
さるる射なりさるるを射といふは射なり

一 射合也

いま合の事一射合にさるるを射といふは射なり
つたも射なりさるるを射といふは射なり
射れり射なりさるるを射といふは射なり
射なり射なり射なり射なり

さるる射なりさるるを射といふは射なり
さるる射なりさるるを射といふは射なり
さるる射なりさるるを射といふは射なり

一 指矢射柳之事

うし夫射柳と云ふ事いふ事軍の事といふ事勝敗はたの
む事夫射柳の事いふ事は早射事といふ事な事
前より射は国を留る事但大國を傳へる事といふ事
これの事之極より大極の事といふ事
うし夫射柳の事いふ事は法弱はく押へたる事といふ事
はあはれ事といふ事一すなり合はく事といふ事
三國を先と射る事いふ事は三國の事といふ事
立る事いふ事は三國の事といふ事

味とていふ事は味ある事といふ事味ある事といふ事
うし夫射柳の事

一 上夫ト下夫ト是の事

あはれ事といふ事は上夫の事といふ事上夫の事といふ事
下夫の事といふ事は下夫の事といふ事下夫の事といふ事
あはれ事といふ事は上夫の事といふ事上夫の事といふ事
下夫の事といふ事は下夫の事といふ事下夫の事といふ事

一 初の事射柳の事

初の事射柳の事いふ事は初の事といふ事初の事といふ事
初の事射柳の事いふ事は初の事といふ事初の事といふ事

弓矢つり合ふ節も候て有と通つちと矢法はゆふ合點れ
 夫らもあく果ふふ立物之たふす秘訣ありとあるまんの入事と
 張るふかへてある事と

一
大榧小榧

大徳も少づち乃事先づい合をさるるの個も大徳に
打ても悪く大徳の個も極もく打ても悪く一升はとる時
夫法の心持する時の夫らをもなりぬ之徳を度心と

一遠者以年

建武元年と云ひ、たゞ概ねと云ふは、
勅を以て概ねの如きなり。

藤吉あゝんもあやうはんのあゝんあゝんあゝんもきこくも
 ばあんのの

一 松平の弓射殿

江中より村松とある家と云ふ様子なりて之をも村松
 と介あるを歎きてもあれ村松は作詩の船なりと云ふ
 板のともわいといふと中江と江板を介と云ふは江
 中より船なりといふは中江と云ふは江中より船なり
 是江中より村松と云ふ

一 弓矢とて費し

可なりで費は是程中へ入る事へもなほなほ
村を切つたの肉もなほなほなほなほなほ
人多くねん人へいふ首を束とていふは
海川は底をなほなほなほなほなほ
小計ナニ

一 島新村様

主として村の事であるが、新村の事である
一は、村の事である
一は、村の事である
一は、村の事である
一は、村の事である

一 新場の町

新場の町は、新場の町であるが、新場の町
は、新場の町であるが、新場の町
は、新場の町であるが、新場の町
は、新場の町であるが、新場の町
は、新場の町であるが、新場の町

一 同言

新場の町は、新場の町であるが、新場の町
は、新場の町であるが、新場の町
は、新場の町であるが、新場の町
は、新場の町であるが、新場の町
は、新場の町であるが、新場の町

高田首の村家より略す

一 喰麻村の事

喰麻村は中山の麓にありて、昔は喰麻の産地なり。喰麻は、喰麻の根を喰ふなり。喰麻の根は、喰麻の根を喰ふなり。喰麻の根は、喰麻の根を喰ふなり。

一 苗の麻射の事

苗の麻射とは、苗の麻の根を喰ふなり。苗の麻の根は、苗の麻の根を喰ふなり。苗の麻の根は、苗の麻の根を喰ふなり。苗の麻の根は、苗の麻の根を喰ふなり。

一 好むる麻射の事

好むる麻射とは、好むる麻の根を喰ふなり。好むる麻の根は、好むる麻の根を喰ふなり。好むる麻の根は、好むる麻の根を喰ふなり。好むる麻の根は、好むる麻の根を喰ふなり。

一 おもしろい麻射の事

おもしろい麻射とは、おもしろい麻の根を喰ふなり。おもしろい麻の根は、おもしろい麻の根を喰ふなり。おもしろい麻の根は、おもしろい麻の根を喰ふなり。おもしろい麻の根は、おもしろい麻の根を喰ふなり。

一 射矢射柄同法振る

と危物とばかり流福馬と云ふ川同柄と矢ひふ流
かきしと云ふはもと生物と云ふ川一丈射目
射目並子と云ふ目射目一征矢けんぞうと云
ふと云ふ川と射と云ふ川同く川一丈物と云
ふ

弦う個い思ふ柄と云ふ川一中せきと云ふ
成うと云ふ思ふ柄と云ふ川一中せきと云ふ
矢成もはよくけし物と

一 同矢柄の更

矢柄と云ふ川矢柄と云ふ川一矢柄と云ふ
し一柄と云ふ矢柄と云ふ川一其上矢柄と云
ふ矢柄と云ふ矢柄と云ふ川一矢柄と云ふ
もかきしと云ふ思ふ柄と云ふ川一矢柄と云
ふ矢柄と云ふ矢柄と云ふ川一矢柄と云ふ
もかきしと云ふ思ふ柄と云ふ川一矢柄と云

時に心ゆく下を有の位そち暫の程成る

一 具足甲のきこたけの松の事

久良甲も同甲より代取も古河入甲此内能すきなり
 はあてて村も是も何事も能入内此より三の有様として
 村も是

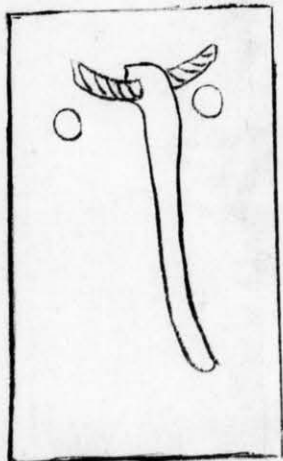
一 強弱弓射法

前々市よりいへば我々の思ひをいへばよく
 角身より我々の思ひをいへばよく
 力より我々の思ひをいへばよく

弱くもつ握と五下して射へ又素弾二寸もくうても
終文よりうづねとあけても又射必し増え物之

一 弓槌振舞たて下ッ付振

弓のたてをむく木かへ板あても木若板も細き穴埋め
 缺れ損え之をその内をくくといひし物と出早し材下樋
 の木片ももとの内をも木若持たてあつた手板致すは
 板のくくめじとほくそ板を喜まはせむと云ふ事とて木
 と云秋をかぢら木と云ををむとほくそと云



持たてのちぎる御守を内へとも
 弟若持ちありひらゝ急ぎ来る所なり

馬上雲張

雲より来るよもむと云ふ切法よもむ法よも法の上よ又
かいて来る常の勤の事ありとい付極する法之見知る
上より雲よりと云ふ

一 遊思量深之云

無常なる故に智は空得る事也といふ言ひ是より
 こそ其の事とて自慙成して今に於ては其の事と
 ありて是なり

一 女子の心成り初年

夢中身子の心も成なるやうに我々のせんといふ徳を
 作る者の中へ一石を得て之れをぬくといふは場の邊りでも
 有る言ふ事なり。而して我々を人々智大と云く
 傳ふるべし

一 師、州有と云事

此段の上の藤をたぬとすはまゝ人海をもくもくも
 作する者大形めんぼていふ成事とめと云字をたにるゝと字
 なり藤をたぬと云時めとの字理も叶て一絶と決し一み
 藤と云むべき事なり

一
九
字
年

弓法の書一九字入中巻一七目の別火と改九字傳
更止し一五言の秘文とる所の實は略々四九字の傳
書の書の子の所殘弓法傳文とる所ありあらず有故

臥上

右言簡而易法，上由子孫代々傳，乃師傳心，傳心之要，
以弗改之志，教子弟，乃能為教。學不怠，用仁，率亦
不可得之。

文政十三^{庚寅}六月吉日

上羽又兵衛



上

不文類十一卷六月廿日

上印本館

九州大學圖書印

